

タイトル	野坂幸弘先生のこと：感謝を込めて(退職記念)
著者	大石, 和久
引用	北海学園大学人文論集, 38: 27-28
発行日	2008-03-00

野坂幸弘先生のこと ― 感謝を込めて

大石和久

野坂幸弘先生は、北海学園大学文学研究科日本文化専攻博士課程の設置にあたり、2001年4月に教授として本学に赴任されました。以来7年間にわたり、学部・大学院で主に昭和期の小説・評論をテーマに講義され、学生指導に御尽力くださいました。

野坂先生は1937年、北海道の小樽でお生まれになりました。先生は、1961年北海道大学大学院に入学され、1965年北海道大学で助手を勤められた後、1970年より本学に赴任されるまで岩手大学で教鞭をとっておられました。先生は、ちょうど岩手大学から本学へ赴任される時期に『視角の螺階 昭和文学試論』を出版されています。「あとがき」には、本書の意図が、本学への赴任と関連づけられて書かれている箇所があります。先生の御研究の歴史における本学赴任の意義を知ることができ、興味深い文章ですので、ここに御紹介します。「日本近代文学研究」の領域自体が根底から揺さぶられている「このような状況においての〈日本近代文学研究〉をめぐる問題を、今後の主要な関心事におかなければならないと、この度の職場の変更を前にして考えざるをえなかったのである。そのひとつとして、これまでの仕事を見直して区切りをつけておくというのが本書の意図である」。また、先生は本書に、先生が北大時代に書かれたかつての御論文「昭和十年の『私』」（1967年）をあえて収録された理由を次のように述べられています。「いま読んでみても神経がささくれだってくるようなこの論考にはながらく悔いのようなものが纏わっているのであるが、私の一度は戻るべきところを、未熟で不機嫌な面持ちで示してくれているとも考えられるからである」。「昭和十年の『私』」という御論文は、伊藤整の文学論の特徴を、私小説の問題に留まることなく「スタイル」「技法」の問題にまでその射程が

伸びている点に求めたもので、このような伊藤整の読みが先生の論のオリジナリティとなっています。先生は後に本論文を発展させ、『伊藤整論』(1975年)を上梓されました。先生がおっしゃる「私の一度は戻るべきところ」とは、もちろん北海道という場所でもありましょう。ただし、同時に、思想的な意味での原点をも指すのではないかと思われまます。先生にとって、北海道という土地への原点回帰は、同時に思想における原点回帰でもあったわけです。

野坂先生を御存知の方ならば、先生のユーモアのある御発言に、その場が和んだという経験をお持ちではないでしょうか。教授会でも、委員会でも、先生の御発言によって場が和むことが多々ありましたし、しかも、それはただ場を和ませる以上の、議論の方向を変えるような力さえ持っていました。先生のユーモアは、議論のポイントを見極めた上での、核心をつく鋭さに裏付けられたものであったからだと思われまます。また、先生の映画・音楽などについての豊かな知識、そしてそのような知識に基づく、流行には流されない映画・音楽へのこだわり、先生独特のダンディズムを感じたのは私だけではなかったはずです。学生の面倒見も良く、お忙しい中、学生主催のコンパにもよく御参加いただきましたし、学生から慕われていた先生でありました。

野坂先生、7年間にわたり、お世話になりました。ありがとうございました。先生の今後の研究、教育活動における一層のご活躍をお祈りしております。